

近代都市東京の水源涵養策

―井の頭池御林の保全をめぐる―

安 藤 優 一 郎

はじめに

明治維新後、日本の首都として一層の巨大化を遂げつつあった東京において、それに見合った飲料水を確保することは、当時極めて重要な課題であった。人口の急増により、東京市の水需要は増加の一途を辿ったが、「水源ハ次第二涸渴シ、水量ハ弥々減殺スルノ実アリ」と、東京市民の飲料水源である神田・玉川上水の水量は逆に減少傾向を辿っていたのである。明治維新の混乱期に、樹齢を考慮せずに水源林を乱伐し、かつ植林への顧慮もなかったため著しく荒廃したことが背景にあった。⁽¹⁾以前は三〇年以上経過していなければ伐採できない慣習があったが、当時は一二、三年経過すれば伐採しており、その結果、時として異常な減水をみることもあった。⁽²⁾

近代都市東京の水源涵養策

水源の涵養において、水源林の保護が極めて重要な要素であることは論を俟たない。後年、多摩川の水源林が展開する当時神奈川県管内にあった三多摩郡を東京府に編入する際の法律案に、「樹林ノ栄枯繁凋ハ直ニ水量ニ影響ヲ及ホス事頗ル大ナリ」と記されたように、水量の増減は水源林の盛衰に左右される側面が大きかった。⁽³⁾よって、近世では「年々交互平均ニ伐採シ栽植ニ怠ラシメス」という輪伐法が厳然として存在し、乱伐が禁止されていた。

近代都市東京を取り巻く水環境面において、上水道の水質悪化の問題は、研究史でも従来より度々指摘されるところである。東京市民は江戸の時と同様に、武州多摩郡牟礼村の井の頭池（現東京都三鷹市）を水源とする神田上水（現神田川）と、多摩川流域の同郡羽村（現東京都羽村市）より取水した玉川上水から飲料水を得ていた（図1）、当時両上水とも汚染が進行し、飲用には不適切な状態

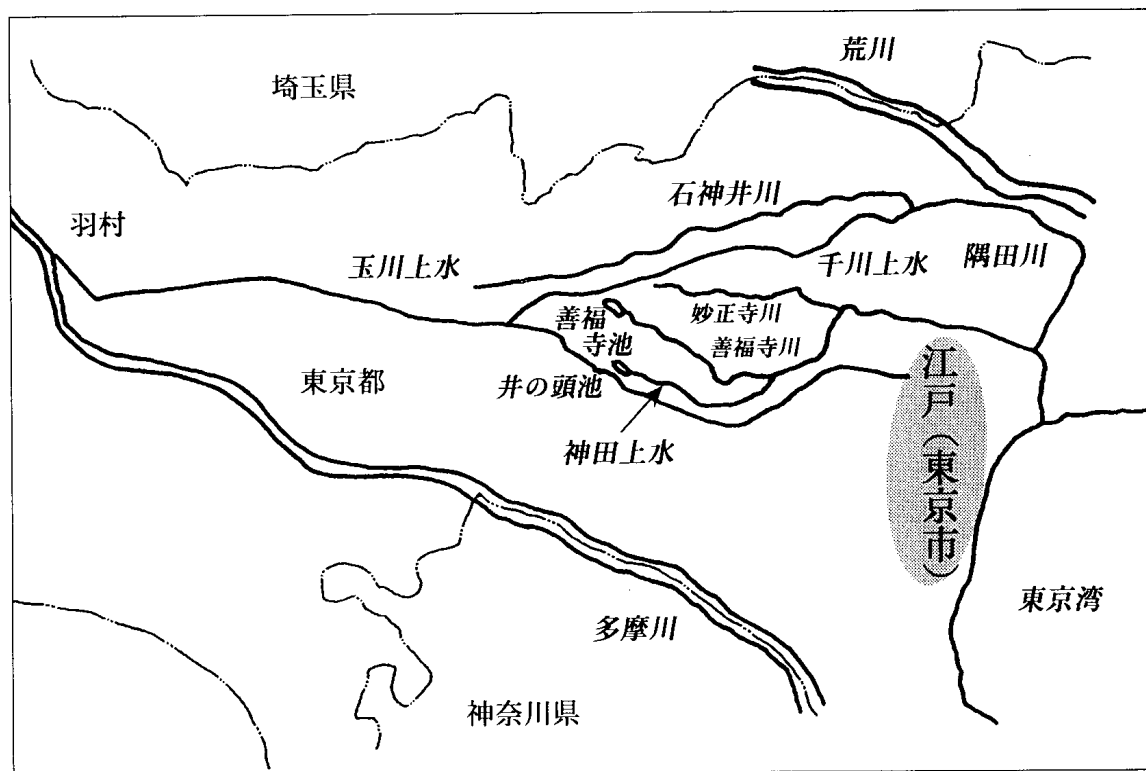


図1 江戸(東京)上水略図

であった。そのため、当時大きな社会不安を引き起こしていた水系伝染病であるコレラの大流行も相まって、その改善が強く叫ばれるようになり、東京市区改正の重要事業として、⁽⁴⁾清澄にろ過された水を鉄管で配水する欧米式の改良水道の布設が計画されるに至った。明治三二年(一八九九)には、市外淀橋の地に浄水場(現東京都庁周辺)が設置され市内への配水が開始される。⁽⁵⁾しかし、それ以前から、東京市では上水道のみならず下水道を改善するための施策を次々と遂行し、生活環境の改善につとめていたが、近代都市研究では従来その点が全く等閑視されていた。前稿ではこうした研究史の問題点を踏まえ、東京市の下水処理問題への取り組みを、市内各所に設置されていた街頭便所の存廃問題に着目することで解明したが、⁽⁶⁾同じくコレラ問題を背景とした上水道改善への取り組みに関しては未検討のままである。

近代東京の上水道問題を取り上げた代表的な研究である『玉川上水の歴史と現状』⁽⁷⁾、『東京近代水道百年史』⁽⁸⁾では、東京市区改正事業以前より、護岸の改築・上水敷地の拡張などの水路改良策や水源林保護などの水源涵養策が取られていたことが指摘されている。同書は、東京の水環境の保全に関する数少ない研究として非常に注目されるが、東京の水道制度(玉川上水)の変遷を概括的に叙述する性格上、各対策の事例紹介のレベルにとどまっている限界がある。よって、別稿では前者の水路改良への取り組みを玉川上水を素材として検討を試みたが、⁽⁹⁾後者の水源涵養策にしても、前記の通り、東

京市にとって急増していた水需要を賄うことは急務の課題であり、ひいては水質改善にも有用であろう。さらに、従来の研究では浄水場の設置・鉄管の布設の有無が上水道改良の指標とされてきた傾向があるが、水環境の改善とは浄水場設置や鉄管布設のみで達成されるものではなく、水路改良や水源涵養といった施策も重要な要件である。よって、それらの施策を総合的に把握した上で、近代に限ることではないが首都東京の上水（環境）政策とは評価されるべきもののなのである。

本稿ではこうした問題意識・分析視角のもと、市区改正以前の東京市による水環境政策に関して、東京の上水道のうち神田上水を素材として考察をおこなうものである。具体的には、水源である井の頭池の周囲に旧幕府時代より植林されている御林（水源涵養林）の保全問題を分析することで本課題を果す。今までの江戸（東京）上水研究では、玉川上水に研究が集中している観があり、神田上水を対象した本研究とはそうした上水研究の欠を埋める作業にもなる。

井の頭池五町三反四畝七歩（一六〇二七坪）、及び付属する芝地五町三反四畝七歩（一六〇二七坪）は牟礼村に位置していたが、幕府勘定所の支配下に置かれていた御林一一町四反五畝歩（三四三五〇坪）が所在する字御殿山の地は（現井の頭自然文化園など）、当時多摩郡吉祥寺村（現東京都武蔵野市）内にあり、同村が旧幕府時代以来、御林は勿論、井の頭池及び付属する芝地の管理を命じられた（図2）。よって、吉祥寺村が井の頭池及び御林の保全問題に当事者

として深く係わるのであるが、まずは同村による井の頭池及び御林の管理の実態からみていくことにしたい。

一、御林・池の管理

吉祥寺村が担っていた井の頭池の管理とは、具体的には池内の芦・茅・水草・藻草の苅り取り（掃除）のことである。井の頭池に關する当時の記録には、「今は蘆・かや己かまゝに茂り、樹木池に落倒レ、水清々ならず。至ての不掃除なれども、風景あしからず⁽¹⁰⁾」と、池内に水草類が繁茂していたことが共通して記述されている。しかし、こうした実情は池の水質を悪化させるとともに、水量を減少させる要因ともなり、江戸市民への安定した水供給を志向する幕府にとって看過できない事態であった。当初、「定浚」の者つまり定期的に池の水草・藻草を苅り取る者はおらず、池に付屬する芝地の管理を担う吉祥寺村の「芝地請負人」が池の掃除も担当していたが、前記の通り請負人による掃除が不十分なため、水草が多分に群生し、水質のみならず水の流れも悪化させていた。そのため、寛政九年（一七九七）以降は、吉祥寺村が芝地請負人に代り、隔年ごとに刈り取りを担当するようになった⁽¹¹⁾。その後、年代は不明であるが、芝地も吉祥寺村が管理を担うようになり、それまで芝地請負人が年間四貫文ずつ納入していた野錢を、以後は同村が代って納入している⁽¹²⁾。同所で取れる草が、農地の肥料になるとして課税対象と

なっていたのである。

こうして、吉祥寺村が井の頭池及び付屬地である芝地の管理を担っていくことになるが、池に關しては、飲料水としていた江戸（東京）市民も、市中の水道組合が池の水門や柵の普請・修復費を負担するという形で、管理体制の一翼を担っていた。一方、井の頭池と江戸市民を結ぶ神田上水流域の村々は、草堰を設けて上水を分水し田用水として利用していた。武州豊島郡戸塚村（現東京都新宿区）では、毎年五月（八（九）月に草堰を設けて田用水としており、草堰の設置・取り払いに際しては、代官所、明治に入ると東京府に届け出ることになっていた⁽¹³⁾。だが、神田上水とは江戸市民の飲料水が本来の用途であるため、幕府としては上水を清潔に保って水を円滑に流さなければならず、上水縁に繁茂する葭・茅・藻草の苅り取りといった上水保全の責任を流域の村々に課していた（持場村制度）。この役務は当該諸村にとっては重い負担であったが、明治に入ると、井の頭池の掃除費まで負担させられている。

明治六年（一八七三）、東京府は井の頭池の藻草苅に掛かる費用一六〇円のうち、一二〇円は神田上水を飲料水として用いている東京市中の者に負担させるが、残り四〇円は流域の村が負担するよう当該の諸村に通達してきた。これに対し、戸塚村をはじめ流域二三ヶ村は同年二月一五日、自分の持場の上水の浚いや草の苅り取りをしていることを理由に挙げ、藻草苅の費用は市中の者が全額負担して欲しいと願ったが、結局は出金の分担を余儀なくされる。しか

表1 井の頭池御林樹木数一覧（安政5年）

成木の分類	本数	大きさ
松	139本	長4間～7間半・目通り6尺～1丈2尺
同	741本	長3間～5間・目通り2尺5寸～8尺7寸
同	13本	長3間～5間・目通り2尺5寸～8尺7寸
同	10本	但、育木。
檜	160本	長1間～2間・目通り1尺～1尺8寸
同	120本	但、育木。
槻	7本	長1間半～2間・目通り5尺8寸～8尺5寸
同	12本	長1間～1間半・目通り1尺6寸～4尺5寸
榎	55本	長1間半～3間半・目通り2尺～5尺5寸
同	76本	長1間半～2間半・目通り1尺～1尺8寸
同	32本	但、育木。
赤松	7本	長1間～2間・目通り1尺～1尺5寸
同	10本	但、育木。
栗	918本	長1間半～2間半・目通り1尺～4尺8寸
雑木	1本	長1間・目通り1丈
同	340本	長2間半～4間・目通り3尺5寸～9尺
同	1023本	長1間～2間半・目通り1尺～3尺5寸
計	3664本	
小苗木		
松	113本	
檜	6610本	
榎	1030本	
赤松	1890本	
栗	170本	
雑木	1218本	
計	11031本	

し、同二七日に、各村が負担している持場の堤防修繕費や草の刈取り、井の頭池の藻草刈費を負担する代りに、市中の者にも堤防修繕費等を負担させようとする意図が窺える。東京府も、この願を認め

たようである⁽¹⁵⁾。池の維持・管理といっても吉祥寺村のみが担っていたのではなく、飲料水とする江戸（東京）市中の者や、明治に入ると田用水として利用していた流域の農村も管理体制の一翼を担っていた訳であるが、本稿の考察対象である御林は吉祥寺村が単独で管

理の責務を負わされていた。

表1は、同村が安政五年（一八五八）におこなった御林内の樹木調査に基づいて作成したものである。

松・檜・榎といった針葉樹が主たる樹木であったことが窺える⁽¹⁶⁾。吉祥寺村による御林の管理を監督していたのは勘定所内の御林御手入方という部署であり、その指示に基づき、同村では必要に応じ御用材として伐り出していたが、その用途としては主に次の三つが知られている。多摩郡和泉村（現東京都杉並区）に置かれた幕府の軍事施設である和泉新田焰硝蔵の普請材、多摩郡関村（現東京都練馬区）の溜井込樋の普請材、そして同郡中野村（現東京都中野区）と豊島郡柏木村（現東京都新宿区）の間を流れる神田上水に掛かる橋（淀橋）を掛け替える際の普請材として使われていたということである。御林の樹木は御用材としてはあまり伐り出されていなかったことが窺えるが、それは御用材としての供出よりも、水源涵養林として保全し続けることが御林設定の第一義的な目的であったことを

※「河田家文書」『武蔵野市史』続資料編3、535～8頁より作成。

真に示している。

林の落ち葉・下草の刈り取りは吉祥寺村に許されていたが、その代り「下草永」という名の小物成を納めることになっていた。芝地に賦課された野銭の場合と同様に、肥料とみなされていたのであり、明治に入っても年間二円ずつ東京府に納入している。⁽¹⁸⁾ 植林については、該地の地味に合った苗木を植え付け、根が付いた段階で代官所に届け出ることになっていた。⁽¹⁹⁾ 弘化元年（一八四四）には檜・赤松を各二〇〇本、同二年（一八四五）は檜三五〇本、三年（一八四六）は檜三五〇本・赤松二一八〇本・榎一二〇〇本、嘉永四年（一八五二）は檜二〇〇〇本、同五年（一八五三）には檜三〇〇本を植林している。⁽²⁰⁾

樹木を伐り出す際には、掛りの役人が立ち会うことになっていた。弘化二年（一八四五）に、「雑木」として三八本（檜二一本、栗九本、ゑこ五本、そろ二本、楓一本）を伐り出した際には、九月に勘定所普請役の見分を受けた上で、一〇月一六日より伐採を開始している。枯れて「損木」と認定された樹木は、近隣の村を対象として入札をおこない、希望がなければ吉祥寺村に払い下げることになっていたが、質の悪い材木の場合が多いため（「節曲り・雨露入・朽木」）、近隣の村で入札を希望する者はおらず、結局は吉祥寺村が払い下げという名の買い取りを余儀なくされるのが実情であった。

弘化元年は六三本、二年は九二本、四年（一八四七）は一二五本

が損木として払い下げられたが、⁽²¹⁾ 嘉永七年（一八五四）時は、総樹木数五九八二本のうち、立ち枯れたり、前年八月の大風雨により折れて損木と認定された樹木が七二本もあった。結局吉祥寺村が買い取るようになったが、上申した価格では低すぎるとしてその引き上げを強く要請されており、御林の管理が同村にとり重い負担であったことが再確認される。⁽²²⁾ また、掛りの役人が出役する際には、宿所の準備や接待などの役務が、植林した箇所については毎年春と秋の二回、根元を引き寄せたり、日当りを防ぐといった苗木を成木にするための作業が課されたが、その際、吉祥寺村は多くの人足を動員しなければならなかった。⁽²³⁾

このように、吉祥寺村は村内に御林を抱えていることで、御用木の伐り出し、損木の買い取り、苗木の植え付け、樹木の手入れ及び掛りの役人の接待といった役務が課せられており、同村にとり御林の管理が非常に重い負担であったことは想像に難くない。こうした実情が、吉祥寺村をして御林の伐採・跡地の開発願を提出させる動機にもなっていくが、そうした動きは明治に入ると先鋭化するのである。

二、御林の伐採

（一）開発願の提出

吉祥寺村が開発に名を借りた御林伐採への動きをみせたのは、管

見の限り、旧幕府時代の文久三年（一八六三）二月が最初である。

この年、吉祥寺村では村内の百姓一同の名で、樹木を伐採して跡地を農地とすれば村方一同が助かるという趣旨のもと、御林の開発願を提出して欲しいと村役人に要請する議定を結んでいる。御林全域（三四三五〇坪）を対象としたものではなく、その八二％に当る九町四反八畝歩（二八四四〇坪）の開発が想定されていたが、該地には二四六六本の樹木（松・檜・榎・槻・栗）と七五〇〇本の小苗木が植えられていた。⁽²⁴⁾この時は、御林の開発願が提出されるまでに至らなかったが、幕府が倒壊し明治新政府が樹立されると、開発に向けての動きが急となる。明治元年（一八六八）一月一日、吉祥寺村は武蔵知県事古賀一平の役所に、次の願書を提出した。

乍恐以書付奉申上候

武州多摩郡吉祥寺村役人惣代左之もの共一同奉申上候、今般御林木之内悪木伐払跡、新田開発亦は御林ニ仕立候共、其場所ニ応し御為筋之方、村々ニおゐて見込之趣、書面ヲ以可申上旨御触之趣、承知奉畏候、然ル処、当村御林之義ハ雜木林ニ而御用立木品無御座、殊ニ最寄ニ津出し場無之、東京牛込河岸迄道法四里半余陸付場所ニ而、是迄御用材御伐出し節も馬車ヲ以運送仕、多分之運賃相懸り候程之義ニ付、年々風折・立枯等出来仕而も所御払ニ相成候場所故、格別御為ニ難相成御林と乍恐奉存候、且亦当村方之義は皆畑ニて、人別ニ引競候而ハ作り面少く、殊ニ御林西北附之畑ハ木陰・差根等ニ而諸作物実法兼、無

近代都市東京の水源涵養策

抛雜木林ニ致置候場所も有之、尚更作場少く年々夫食引足り不申、近村より買入、漸相統罷在難洩至極仕、無余儀無高同様之小百姓ハ他村江出稼、亦は小商ひ等仕、其日ヲ漸宮罷在、殊ニ右御林之義は平地ニ而、開発仕候得は宜敷作場ニ相成可申と奉存、就而は右御林之町歩、困窮之小前江夫々割渡耕作為致候ハ、自然夫食も相増、一同相助り難有仕合ニ奉存、且亦御年貢御収納も相増、乍恐御為筋ニも相成可申と奉存候ニ付、此段奉申上候、何卒以 御慈悲、当村御林木御伐取跡新開被 仰付下置度、偏ニ奉願上候、以上

武州多摩郡

吉祥寺村

百姓代

辰十月十八日

重蔵

年寄

兵左衛門

名主

七右衛門

古賀一平様

御役所⁽²⁵⁾

従来吉祥寺村では、御林に損木（悪木）があれば代官所に申し出、その見分を経た上で伐採し、跡地には地味に合った苗木を植林していたが、今回は伐採した跡地を新田開発するにせよ、植林して

御林のままにするせよ、国家の利益（「御為筋」）になる方策があれば上申するよう政府当局より命じられたのである。吉祥寺村としては、既に文久三年段階で、林を伐採して農地とすることを志向しており、今回の指令はいわば渡りに船というべきものであった。よって、この機を捉え、「新田開発」すなわち、御林の樹木を伐採し、跡地を開墾して農（畑）地としたいとする願書を提出したのである。

同村によれば、この御林は雑木林であり、御用に役立つ種類の樹木はない。立ち枯れたり、風雨のため折れて損木となった樹木に至っては、陸路で江戸に運ぶと相当の運賃が掛かるため、結局自村に払い下げられることになり、国家の利益にも全くなならない。品質も悪いため、吉祥寺村にとり迷惑でしかなかったことは既述の通りである。一方、同村には畑しかなかったが、農民の数に比べれば農地は少ない。その上、林の西北側に隣接する畑は樹木の陰となって日があたらず、あるいは根が入り込んでくるため作物が実らず、雑木林のままの地所もあって、その分農地が減っている。その結果、食料が不足し、近村より購入することで凌いでいる状況である。零細の農民に至っては、他村に稼ぎに出たり、小商いをする事でその日を過ごしている。よって、平地であるため農地に適しているこの御林を、困窮の農民に分け与え農地として耕作をさせれば、食料も増えて一同が助かる。農地が増えることで年貢高も増加し、ひいては国家の利益（「御為筋」）にもなるという論法で、伐採した跡地

を農地として開墾することを嘆願しているのであるが、吉祥寺村としては今回伐採した跡地のみならず、御林全体の開墾を目論んでいたことが、この願書より判明する。

すなわち、御林は国家にとっても村にとっても有用なものではないが、農地とすることで国家にも村にも利益がもたらされるというのである。御林の樹木とは主に杉・檜・榎であり、決して雑木林ではないが、御林が雑木林であることを意識的に強調している点に端的に示されるように、そのデメリット面を強調することで御林の農地化を実現しようとする意思が窺える。吉祥寺村としては、御林を農地とすることで収穫の増加が期待できる訳であるが、御林管理の負担からも逃れられる利点もあった。御林の農地化には、いわば一石二鳥の効果があったが、この地域の経済状況が非常に悪化していたことも、農地化を望んだ理由として指摘できよう。

翌明治二年（一八六九）、吉祥寺村に隣接する多摩郡関前村（現東京都武蔵野市）名主井口忠左衛門は、下肥など肥料価格が高騰して農業経営が危機に瀕し、さらに農民が夫食にも事欠いている実情を受けて、肥料をはじめ諸物価の引き下げ策を献策する建言書を品川県に提出した。⁽²⁶⁾東京近郊地域では、幕末以来の諸物価の高騰、武州世直し一揆をはじめとする社会情勢の悪化、気候の不順などの要因が相まって、極度の不景気の状態に陥り、農民の困窮化が進行していた。既に武州世直し一揆直後の慶応二年（一八六六）九月、関前村や吉祥寺村など武蔵野農村の二〇ヶ村は、夫食に事欠いて肥料

代も支払えない現状を踏まえ、倅約や肥料の融通を主旨とした議定を結んでおり、井口忠左衛門が危惧した状況とは吉祥寺村も含めた武蔵野農村一帯が抱える問題でもあったことが窺える。そして、明治二年末から明治三年（一八七〇）にかけては、経済情勢の悪化を背景として、関前村など武蔵野新田一三ヶ村による大規模な一揆（社会騒動）まで起きている。⁽²⁸⁾

つまり、今回の吉祥寺村による開発願とは、そうした窮状を克服するための対応策であったとも位置付けられるのである。井の頭池の御林伐採問題は、こうした武蔵野農村の経済状況とも複雑に絡み合っていたのであるが、御林が払い下げられたのは明治四年（一八七二）のことであった。ところが、この時、払い下げを受けたのは吉祥寺村ではなかったのである。

（2）御林の払い下げ

明治五年（一八七二）二月、吉祥寺村では次の議定を村内で結んでいる。冒頭で、既述したような御林管理の負担の重さ、諸物価の高騰や農地に比べて農民数が多いことで夫食不足となり、近村に出生して生計を立てている現状が述べられた後、先の御林開発（開墾）願の顛末が以下の通り記されている。

取究議定一札之事

一当村字井之頭御管林之義は旧来惣村懸りニ御座候処、数度御懸り様方御出役之砌は、御用宿且諸役村方一同ニ而相勤、尚

近代都市東京の水源涵養策

又先年御用材御伐出之節并跡御植附之砌、其後年々夏秋両度ツ、御植附之場所刈被^(払)根元引寄、日当りヲ防キ、追々成木仕、是迄村方人足等夥敷相懸り殆難済仕、然ル処、当村方之義ハ從來畑少、殊ニ近年は別而諸難穀高直ニ相成、年増人別多ニ相成、夫食作り面不足致、無拠近村江出作漸活計相立候折柄、先年々度々村方相談之上、右御官林開墾相願、貧民共江割合、耕作精農仕度旨ヲ以村役人中江申出候処、早速其筋江被願呉候得共、更ニ御聞済ニ不相成、然ル処、今般御払下ケ御布告ニ付、小前一同難有心得、是非ニ村方江引受、夫々割合耕作致候ハ、大小百姓相助り候迎、過分出精仕、本畑同様之積りヲ以入札差入候間、無相違村方江落札可仕義、然ハ早速開墾之心得ニ而、農業向も夫々操合日々待居候処、東京四ッ谷天王横町岩崎伝次郎と申もの江落札相成候趣承り驚入、早々落札高承り候得は、合金高之内金壹分違、何分歎ケ敷一同致愚案偽惑、旁右始末、其御筋江歎願仕候得共、一般入札ニ而落札ニ相成候義、今更何様歎願致候共難聞済段被仰聞、尤格別之以御仁恤ヲ以取扱人被仰付、先方江被及懸合候処、半々ニ而宜敷候ハ、地元義且ハ御役所被仰付之義も有之、右ニ而御承知被下上ハ聊之入用金ニ而相譲り可申義被申、村方ニ而は半々引受候而も夫々分配差支候得共、多分之趣意金も無之被相譲候積り難有心得、扱人江相任せ、然ル処、右扱人先方江譲り金高懸合被及候処、自由勝手ヲ申、東

京江扱人呼寄候義は数度、且日延又は明日村方迄自分共出向
 迎、無沙汰ニ延引致候事も有之、彼是申釣り、当村之義神奈
 川県ニ相成候ヲ待居、弥取詰懸合被及候得は、地面見分之上
 高下相附、惣体ニ而金百貳両加へ、半々江金五拾貳両加へ候
 得は、相渡し可申義申之、左候得は、詰り示談致候存意更ニ
 無之義ニ陥り、右様彼是被引止、無抛余計之人費等被相懸候
 ニ付、尚々残念至極、仮令如何様困候共、右地所江は一向差
 構不申、且又私欲ニ而彼是岩崎詣り候而は、自家人外之廉ニ
 陥り候間、議定連印致置、是迄所持之作面ヲ大切ニ致、元御
 官林之地所江は手出し申間敷、右地所是義ニ付、何れ江難渋
 出来候も難計、其節入用金何程相懸り候共、一同而出金聊差
 支不相成様可仕、右議定連印之もの後日違変申もの有之候
 ハ、同様取詰メ懸合可申、依而為後日連印之議定一札、如
 件

武州多摩郡吉祥寺村

百姓

組頭

明治壬申年二月 日

小林菊次郎⁽²⁹⁾

(以下略)

明治元年に提出した開墾願に対し、政府当局は暫く何の対応も示
 さなかったが、同四年に至り、御林（御官林）を管轄していた勧農
 寮より払い下げの布告が出された。よって、吉祥寺村では入札をお

こなったが、落札したのは第三大区九小区四ツ谷天王横町（現新宿
 区）の岩崎伝次郎という者であり、地所・樹木合わせて一六一〇円
 九二銭五厘（地所八五九円。樹木四四九八本七五一円九二銭五厘）
 で払い下げられた。⁽³⁰⁾ その金額とは、吉祥寺村の入札額より金一分高
 いものであった。

止むなく吉祥寺村では、当局の仲介で扱い人を通じて岩崎との交
 渉に臨み、岩崎からは地所の半分を僅かな金額で譲るという返答を
 得た。半分のみでは農民個々に分配するとなると小規模になり、支
 障が生じることが予想されたが、大金を必要としないのならばとし
 て、同村では扱い人に交渉を任せることとした。ところが、金額の
 交渉の段になると、岩崎側は扱い人を東京に何度も呼び寄せたり、
 東京から出向くと知らせてきても延期することもあり、吉祥寺村の
 負担を増す結果を招いていた。そのため、神奈川県管轄下に入っ
 た後、同村では岩崎側に迅速な交渉を求めたが、岩崎側では地所を
 見分した上で、払い下げの代金一六一〇円九二銭五厘に金一〇二両
 を加えた金額の半額で譲渡すると通達してきた。ここに至り、吉祥
 寺村では岩崎側に譲渡する意思がないと判断し、このままでは余計
 に費用も掛かり兼ねないとして、岩崎の所有地には、今後一切関わ
 らないとする議定を村民一同で結んだのである。⁽³¹⁾

岩崎との軋轢により、村内にありながら、吉祥寺村では御林に係
 わりを持つことを自ら否定してしまい、同所を農地とする望みは消
 えてしまったのである。この後、岩崎では樹木を次々と伐採してい

くが、この一連の経過で留意すべきは、政府（勸農寮）にせよ、吉祥寺村や岩崎にせよ、御林の水源林としての効用が全く配慮されていないことである。旧幕府時代は幕府による厳正な管理のもと、吉祥寺村に多大な負担を強いながらも御林は保全されていたため、水源林としての効用が発揮され、神田上水は江戸（東京）市民の貴重な飲料水源としてあり続けたのであるが、岩崎による樹木の伐採は、必然的に池の水量の減少を招き、東京市民の生活を脅かすこととなった。よって、東京府は御林の現状回復を次の通りはかるのである。

三、御林の保護・育成

（1）御林の買い戻し

明治三年一月二〇日、村内を玉川上水が流れる豊島郡代田村（現東京都世田谷区）の水番人新助と、羽村を起点とする同上水の終点である四谷大木戸（現新宿区）の水番人半四郎が、管轄外の神田上水の水量減少について、次のような興味深い届書を提出している。

乍恐以書付御訴奉申上候

玉川御上水堀通水番人新助・同半四郎奉申上候、神田御上水源井之頭御池近辺品川県御支配所吉祥寺村御林樹木切取、開畑ニ相成風聞有之、全く樹木切取上は、其辺水気薄く相成と、往昔より申伝罷在、既先年玉川御上水助水箱根ヶ崎村狭山御池近辺御

近代都市東京の水源涵養策

林樹木切取候而も、御池水気薄く相成と聞伝罷居、依之、乍愚案、此段申上置候、以上

明治三年正月廿日 代田村水番人 大木戸水番人

新助印 半四郎印⁽³²⁾

当時品川県の支配下にあった御林の樹木が伐採され、跡地が農地として開墾されたという風聞が紹介されているが、前記の吉祥寺村による開墾に向けての動きが誤って伝えられたものであろう。しかし、該地の樹木を伐採してしまうと池の水量が減少するという言い伝えが往古よりあり、玉川上水の場合も、その助水堀としての役割を果たした箱根ヶ崎村（現東京都瑞穂町）に所在する狭山池近辺の御林の樹木を以前伐採したところ、水量が減少してしまったという言い伝えがあることを指摘している。両人はこれ以上述べていないが、旧幕府時代以来、玉川上水の水量の監視役でもある水番人としては、水源林の伐採により水量の減少が生じていることは看過できず、玉川上水での先例を紹介しつつ、善処策を当局に求めたものと言える。換言すれば、井の頭池の御林にせよ、狭山池近辺の官林にせよ、その水源涵養林としての効用が指摘されているのであり、旧幕府が水源涵養の意図をもって同所の樹木の保護・育成をはかっていたことも再確認できる。

この報告に対し、政府当局はすぐには善処策を取らなかったようであるが、別稿で指摘したような水質悪化の問題を背景として、上水問題に関心を強めはじめていた東京府は、五年五月一四日に両上

水の管理を東京府に移管させたのを皮切りに、上水路の改良に強い意思を示すようになる。七年（一八七四）に入ると、土手の築造・水路の原状復元などの具体策に着手したが、⁽³³⁾水源涵養面においても、水源林の保護・育成策が推進されていく。同年八月十五日、東京府知事大久保一翁は内務卿伊藤博文に対して、当時岩崎伝次郎の所有地であった御林（官林）の買い戻しに関する次の伺書を提出した。

宮第五百五拾七号

神田上水源井之頭池附官林買戻之儀ニ付伺

神田上水源武州多摩郡弁礼村・吉祥寺入会井ノ頭池廻り西北之間、反別拾壹町四反五畝歩字御殿山ト相唱、従来池附官林ニ而大樹木繁茂候處、明治四未年中勸農寮ニ於テ、地所・樹木共合金千六百拾円九拾貳錢五厘ニ而、第三大区九小区四ツ谷南伊賀町岩崎伝次郎江扨下ケ相成、大木之分追々切扨候ニ付、右池林付之方ニ從來蛇口貳ヶ所有之、平常清泉湧出候處、伐木已來逐年涸レ、当今ニ至候而は湧水一滴も無之、根元右御殿山生育之樹木ハ、池水助成之為取設候官林之由口碑も有之、此上殘木伐扨、茶畑等ニ開墾致候時は山沢不通氣理ニ而、数年ヲ不出、府下飲水欠乏相成、難澁可致見込ニ付、右地所昔日之通樹木生育致、池附助成林官有地ニ買戻シ申度、右入費仕扨之義は、一体全府ニ關係至候儀ニ付、代価官費ヲ以御下ケ渡相成候様致度、伺之通御聞届相成候上は、地価之儀は神奈川県共猶打合之

上、詳細取調、再應相伺可申、至急御評決御指令有之度、略繪図相添、此段相伺申候也

明治七年八月十五日

東京府知事大久保一翁

内務卿伊藤博文殿

明治四年に、御林が地所・樹木合わせて一六〇〇円余で岩崎伝次郎に払い下げられた訳であるが、大木を次々と伐採した後、平生清水が湧き出ていた箇所（蛇口貳ヶ所）の水が涸れてしまい、現在では水が一滴も湧いてこない。この樹木は水源涵養（池水助成）のために植えられたという言い伝えもあり、残っている樹木も伐採して茶畑などに開墾してしまうと、数年を経ずして東京府下の飲料水は不足することが見込まれるとして、以前の通り樹木を植林して水源涵養林とするため、官有地として買い戻すことを願い出たのである。その費用については、東京府に関わることでありとして官費の支給を申請している。この伺いは同月三十一日に許可され、その後、買上代金について検討された結果、一月二二日に至り、一三三・一四七五錢（地所八五九円・樹木四七二円七五錢）で買い戻すことと決定をみた。⁽³⁴⁾

水源井の頭池は、既に神奈川県から東京府に支配が移管されていたが、この年、水源涵養林であった林地一一町余も神奈川県から東京府管轄の官林地となったのである。この御林は以前吉祥寺村が管理に当たったが、井の頭池付属の芝地五町三反四畝七歩については、当時も同村が管理（掃除）を課されており、茅草の刈り取りが許さ

れる代りに野錢四貫文を納入していた。しかし、御林が官林地として買い戻された直後の九月、東京府では神奈川県に対し、吉祥寺村による芝地掃除は行き届いておらず同村に掃除を請け負わせているのは不適切である。よって、同村への請負を停止して賦課している野錢を免除してはどうかと掛け合っているが、芝地も神奈川県（吉祥寺村）から東京府の管轄下に移そうとする目論みがその裏にはあった。この件は、一月に神奈川県から、吉祥寺村への請負及び野錢の徴収を停止しても支障はないという回答を得たこともあり、一二月二三日に至って、内務卿の大久保利通が東京府に対し、芝地を官有地第三種に編入し、「水源涵養之為メ」植林を進めていくことを指示し、決着をみている。⁽³⁵⁾さらに、東京府は九年（一八七六）一月一五日に、牟礼村内にある井の頭池縁の大盛寺付属地六反九畝二七歩のうち観音堂敷地など五畝二〇歩を除いた六反九畝七歩（二〇七七坪）を、「池水増涌之為メ、地宜ニ寄り樹木等植付」けるために官有地第三種に組み込みたいと願い、三月二〇日に許可されている。⁽³⁶⁾芝地や大盛寺付属地が水源涵養地に編入されたことで、その規模は一、五倍強に増加することとなった。

こうして、井の頭池のみならず、周辺の付属地も神奈川県から東京府の官有（林）地に編入され、水源涵養林を保護・育成するための環境が整えられていったが、最後に同所への植林の様子についてみていく。

近代都市東京の水源涵養策

（2）植林の開始

同年四月五日、東京府権知事楠本正隆は内務卿大久保利通に次の伺書を提出している。

神田上水々源井之頭官林江檜苗植附之義伺

神田上水水源神奈川県管内武州多摩郡牟礼村地先井之頭池附字御殿山官林、前年大木伐採跡江檜苗木植付、往々樹木繁茂、上水湧益之為メ枯木払下ケ之義、明治八年十月二日當第千六十二号を以相伺候処、枯木代金之義ハ、神奈川県より納方申出、苗木植附入費之義ハ、是亦同県ハ別段受取方申出候義と可相心得旨、御指令有之、然ル処、右場処は当府於而進退致居候間、枯木払下・苗木植付等、当府ニ而取計候様致度旨、尚亦昨八年十月三十日當第千五百五十九号を以相伺候処、当府取扱之義御聞届相成、即今季節ニ差懸候ニ付、檜長三尺ハ四尺迄一万本植附入費積之義、一般江広告および候処、府下第一大区七小区相川町壹番地木村喜代助義、金百四十七円八十錢ニ而落札相成候ニ付、調査致候処、不相当も無之候間、右代価を以至急植付申度、右入費金御下ケ相成候様致し度、別紙書類相添、此段相伺候也

明治九年四月五日

東京府権知事楠本正隆

内務卿大久保利通殿

御林を買い戻した後、東京府では檜の苗木の植林を進め、徐々に

樹木が生い茂りはじめていたが、その一方、同じく水源涵養のため枯れ木を伐採して払い下げていた。間伐（間引き）すること、他の涵養林の成長を妨げないようにする意図があったが、苗木代の支給や枯木代の納入については、御林が神奈川県の管轄下にあった時と同様に、同県がその事務を執っていた。しかし、同所は東京府に移管されており、以後は府が取り扱うことに改めて欲しいと明治八年（一八七五）一〇月三〇日に申し出、許可された。そして、東京府では檜一万本を植林する方針を公示したところ、入札の結果、第一大区七小区相川町（現東京都千代田区）の木村喜代助という者が一四七円八〇銭で落札した。よって、府では代金の支給を内務省に願ったのである。但し、この伺書には書き間違いがあり、実際の落札値は二三〇円であることが、同月二二日、上申されている。この苗木代支給の件は、同二五日に至って許可されている。³⁷⁾以後東京府は前記の地所に植林を継続していくことで、水源涵養林の現状回復及び拡大をはかっているのである。

以上、近代都市東京における水源涵養策（水環境政策）を神田上水の水源である井の頭池の御林保全問題を事例として明らかにしてきたが、植林が再開された翌年の明治十一年（一八七八）四月九日、内務少輔林友幸は東京府に次の通達を出している。水源涵養（林）問題に臨む明治政府の方針が端的に示されている内容であるが、政府のこれまでの一連の施策と比較すると非常に興味深い。

乾地貳百四拾三号

東京府

山林ノ儀ハ建築工作薪炭等ノ利用アルノミナラス、氣候調和・水源涵養・土砂扞止等ノ功アルヲ以テ、官有山林ノ儀ハ、漸次取締相立、殊ニ水源涵養・土砂扞止林ニ至テハ、濫伐禁止候共、民林ニ至テハ濫伐年々増加ノ趣ニ有之候、本來建築・工作・薪炭等ノ儀ハ、人生一日モ難缺品タリトイヘトモ、猶或は他方ノ材料ヲ仰キ得ヘシ、氣候調和・水源涵養・土砂扞止ニ至テハ、其地ニ就キ適宜ノ取締ヲ立ルニ非サレハ、損害避ルヲ得ヘカラス、加之、建築・工作等ノ材料不足ナルハ、不利不便トハ乍申、尚巨害無之候得共、氣候不順・水源枯竭・土砂流失等の諸凶事、先後続起スルニ至テハ、其害山林ニノミ留ラス、田圃ヲ害シ、果穀ヲ歉シ、傍ラ疾疫ヲ誘生シ、歳収ノ多寡ハ、論ヲ待タズ、甚シキニ至リテハ、國力ノ盛衰ニ關係ヲ生スマシキニモ無之、猥然難捨置ニ付、各地方限り実地適当ノ見込相立、遅クモ来ル五月三十一日限り可申出、此旨及御達候事

明治十一年四月九日

内務卿大久保利通代理

内務少輔林友幸

山林には建築材や薪炭といった使途だけでなく、水源涵養や土砂防止等の効用があるため、政府も官有林については、取締方法を整備して濫伐禁止の方針を取っているが、民有林の場合は濫伐が年々増加している。建築材や薪炭は生活必需品というものの、代用品もあり、品不足により不便となっても「巨害」はない。だが、水源涵養などを目的に植林されている樹木が乱伐されては、水源の枯

竭・土砂の流失といった「諸凶事」を招き、その害は山林にとどまらず、田畑を荒廃させて農業にも悪影響を及ぼす。ひいては、国家財政を窮乏させ国力の盛衰にもかかわってしまう。よって、水源涵養林などが乱伐されている現状は放置し難いことであるとして、善処策を検討し報告するよう東京府に命じたのである。

東京府はこの指令に対し、五月三〇日、調査中である旨を届け出ているが、⁽³⁸⁾本稿で解明したように、神田上水の水源涵養林である井の頭池御林については、旧幕府時代より幕府の厳しい監視のもと保全されていた。そのため、神田上水を飲料水としていた江戸市民はその恩恵を受け続けることができたが、御林の管理を担わされた吉祥寺村にとっては重い負担を強いられ続けることになった。江戸市民は、吉祥寺村など上水の管理を担う流域諸村の負担の上に飲料水を得ていたのであるが、明治維新の混乱に乗じて全国的に水源林の乱伐が進行していった。吉祥寺村では御林の開墾願を提出し、自村の農地拡大と御林管理の負担から逃れることを目論んだが、願は容れられなかった。そして、御林は岩崎伝次郎という者に払い下げられ樹木も伐採されてしまい、神田上水の水量減少の要因となって東京市民への水供給を危うくする事態を招いた。吉祥寺村にせよ政府にせよ、水源涵養への顧慮はみられず、それとは逆行する対応であった。

一方、当時神田・玉川上水の水質悪化は深刻化しており、両上水を飲料水源とする東京市民にとり危惧すべき事態となっていた。市

近代都市東京の水源涵養策

政を担う東京府としては、早急に解決しなければならない課題であったが、水源涵養林の乱伐は水量の減少をもたらしたばかりでなく、水質悪化の傾向にも拍車を駆けていた。よって、東京府は明治初年より上水路の改良に強い意欲を示しており、まず明治五年に神田・玉川上水の水源・水路の管轄を府に移した。七年には、政府当局（内務省）に要請して、民有地として払い下げられていた井の頭池御林の買い戻しを実現させて官有地に編入し、植林を進めていった。さらに、水源涵養の趣旨のもと、池の付属地である芝地なども官有地に編入することで植林地を一、五倍強に増加するというように、旧幕府時代にもみられなかったような施策を断行して水源の涵養をはかったのである。

従来、近代都市東京における水環境の改善は非常に立ち遅れていると評価されてきた。浄水場の設置・鉄管の布設の有無がその指標とされてきたことに原因が求められると言えるが、冒頭で指摘したように、水源の涵養・水路の改良も水環境改善の重要な要件であった。本稿で検討した水源涵養面でみれば、既に明治五年の段階で、神奈川県管轄下にあった水源井の頭池を直轄した。次いで七年には、御林を買い戻すばかりでなく、付属する芝地なども同じく直轄（官林）地とし、植林を進めていった。旧幕府時代を上回る規模で、水源涵養林の保護・育成策が積極的に展開されていたのである。明治一年になって、政府は水源涵養林の重要性を指摘しているが、本稿で明らかにした通り、明治七年の段階で水源涵養林の原状復元

及び拡充に取り組むなど、東京府は政府に先行した施策を取っている。いわば、この通達とは、その何よりの証明となっているのである。

浄水場の設置・鉄管の布設が達成されたのは明治中期であり、水質改善という意味では、東京の水環境の整備・改善が立ち遅れていたことは否めない。しかし、同じく水環境改善の重要な要件である水源涵養面において、前記のような保護・育成策が断行されていたことを踏まえれば、東京府の水環境政策を一概に立ち遅れていたと評価するのは極めて一面的であり、むしろ他都市・地域に抜きん出た進取的な側面を有していたと評価できるのではなからうか。別稿で解明した水路の原状復元などの水路改良策が同時期に遂行されていたことも、その評価を裏付けるものである。さらに、東京市民のもう一つの飲料水源である玉川上水（多摩川）の場合、その水源涵養林を直轄できたのは明治二六年（一八九三）のことであったことを鑑みれば、本稿で解明した井の頭池御林に対する東京府の施策の先進性は明らかと言えるのである。

おわりに

本稿では近代都市東京の水源涵養策を、神田上水の水源である井の頭池の周囲に植林されていた御林の保全問題を事例として解明したが、最後に、井の頭池御林のその後について若干触れ、結びに代

えたい。

明治二二年（一八八九）、井の頭地域一帯が帝室御料林に指定され、保全の環境は一層整ったが、欧米式改良水道の工事完了により、三四年（一九〇一）六月、神田・玉川上水による市内への給水は停止され、御林の水源涵養林としての意義は低下した。しかし、大正二年（一九一三）二月、東京市の要望に応えて御料林一帯が市に下賜され、井の頭恩賜公園となることで保全環境は維持された。戦時中に樹木は大量に伐採されてしまったが、在りし日の姿は、一部ではあるが現在も見ることができる。

註

- (1) 「小柳家文書」「多摩はなぜ東京なのか―多摩東京移管前史資料展史料集―」、小平市中央図書館、一九九三年、二〇四～五頁。
- (2) 「公文類纂」「東京市史稿」上水篇第二、東京市役所、一九二三年、二二～三頁。以下同書は、『上水篇第二』と略記する。
- (3) 「東京府及神奈川県境域変更ニ関スル法律案理由書」「多摩はなぜ東京なのか」、二〇一頁。
- (4) 石塚裕道・成田龍一『東京都の百年』、山川出版社、一九八六年、六〇～五頁。
- (5) 『東京近代水道百年史』通史、東京都水道局、一九九九年、六～一頁。
- (6) 拙稿「東京市区改正以前の屎尿処理対策―牛込区街頭便所掃除人村亀太郎の動向を中心に―」ライブラリ相関社会科学六『環境と歴史』、新生社、一九九九年。
- (7) 『玉川上水の歴史と現状』、東京都環境保全局、一九八五年。
- (8) 註(5)に同じ。

- (9) 拙稿「近代東京における水環境の整備とその波紋―玉川上水の敷地編入問題を中心に―」(未発表)。
- (10) 古川古松軒「四神地名録」『江戸地誌叢書』巻四、一九七六年、一〇六頁。
- (11) 『三鷹市史史料』第三集、一九七二年、六〇～一頁。
- (12) 同前、四五頁。
- (13) 「御普請所自普請所書上扣・田用水草堰願控共」(中村家文書、新宿区歴史博物館蔵)
- (14) 伊藤好一『江戸上水道の歴史』、吉川弘文館、一九九六年、一七八～八三頁。
- (15) 註(13)に同じ。
- (16) 「河田家文書」『武蔵野市史』続資料編三、一九八六年、五三五～八頁。
- (17) 同前、五三八～九頁。
- (18) 同前、五七二～四頁。
- (19) 註(17)に同じ。
- (20) 「河田家文書」、五一九～二〇頁。
- (21) 同前、五一五～六頁。
- (22) 同前、五二一～五頁。

- (23) 同前、五六八～七〇頁。
 - (24) 「河田家文書」、五四六～五〇頁。
 - (25) 同前、五五四～五頁。
 - (26) 同前、三九三～四〇二頁。
 - (27) 『武蔵野市史』資料編、一九六五年、三九八～四〇〇頁。
 - (28) 『武蔵野市史』続資料編一、一九六八年
 - (29) 「河田家文書」、五七〇～一頁。
 - (30) 「水道要録」『上水篇第二』、三六三頁。
 - (31) 「河田家文書」、五七〇～一頁。
 - (32) 「御用留」『上水篇第二』、一七四頁。
 - (33) 註(9)に同じ。
 - (34) 「水道要録」『上水篇第二』、三六二～七頁。
 - (35) 同前、三七二～八〇頁。
 - (36) 「公文類纂」『上水篇第二』、四八七～九二頁。
 - (37) 同前、四九二～三頁。
 - (38) 「水道要録」『上水篇第二』、五四五～六頁。
 - (39) 『武蔵野市百年史』、一九九六年、四八一～九頁。
- 〔付記〕 本論文は、「近代東京の環境政策」(平成13年度科学研究費補助金(奨励研究(B))の成果の一部である)。